

# ダーウィン Darwin, Charles Robert 1809 ~ 1882

イギリスの生物学者。

イギリスのシルスベリに生まれる。父は裕福な医者で、祖父の外科医エラズマス・ダーウィンは進化論の先駆者の一人であった。16歳の時医学教育で有名なエジンバラ大学に入学したが、医学に身をいれず生物の観察や収集、狩猟に興味を示した。父と話し合い、ケンブリッジ大学へ入学して神学を専攻し、牧師を目指すことになったが、博物学への関心は高く、植物学者ヘンズローに師事した。

1831年12月、ダーウィンは、ヘンズローの紹介によりイギリス海軍の測量船ビーグル号に博物学者として乗船し、南アメリカを中心に世界周航の自然調査へと出発した。ライエルの『地質学原理』の影響もあって、5年にわたって精力的に地質や生物の調査、標本収集をおこなった。標本類は、鳥類はグールドへなどそれぞれの専門家にゆだねられた。

周航後、ロンドンで『ビーグル号航海記』の執筆などに忙しい日々を過ごした。周航での調査と帰国後の研究の中で、生物の進化についての確信を深め、ノートを作成して構想をすすめた。30歳の時に陶器製造で有名なウエッジウッド家の娘、従姉エンマと結婚したが、健康がすぐれずその後郊外のダウンへ移った。やさしい妻や子供達に囲まれ病氣と闘いながら、亡くなるまでこの地で研究、執筆を続けた。

## Great Books 36 種の起原(On the Origin of Species by Means of Natural Selection or the Preservation of Favoured races in the Struggle for life)

『種の起原』は、生物進化論を確立した書であり、科学と宗教の関係や社会思想・世界観に大きな影響を与えた。

ダーウィンはビーグル号での世界周航中の調査や、帰国後に地質学や動物学の研究を進めていく中で、ガラパゴス諸島の鳥や爬虫類が島ごとに異なる特徴をもっているのに注目し、種の個別創造論(神の創造)に対して、種の変化や生物進化の事実を信じるようになった。さらに、1838年にマルサスの『人口論』を読み、過剰な個体間の生き残りをかけた競争の中で、種内の変異の中から一部が生きのび他は絶滅し、変化した形質を子孫に伝えていくという理論を得た。この自然選択説について、彼は1842年には35頁にまとめ(スケッチ)、1844年231頁の論文にし(エッセイ)、1856年から執筆にあたっていた。しかし、1858年にマレー諸島に行っていたウォレスから「変種がもとのタイプから無限に遠ざかる傾向について」という自然選択説と同じような内容の論文が届き、地質学者ライエルと植物学者フーカーの配慮で、両者の論文が同時に公表されることとなった。

ダーウィンは構想してきた著書の抄本として、1859年に『種の起原』初版1250部を刊行した(正確な書名は、『自然選択の方途による種の起原、または生存闘争における有利な種族の保存について』)。彼はこの書において、慎重にキリスト教的世界観に配慮し、また豊かな知識を駆使して完成度の高い科学理論を確立させた。

刊行後、ダーウィン説に対して神学者、科学者、哲学者などから批判・擁護論争が高まったが、ダーウィンは、第3版では「種の起原に関する意見についての最近の進歩の歴史的素描」を書き加えるなど、1872年の第6版(最終版)まで改訂を続けた。この間、次第に生物の進化は常識となり、産業資本主義の発展の中で、スペンサーの進化哲学の流行などの影響もあって、自然選択説は進化論(第6版で初めて導入された語)という形で一般に受け入れられた。ダーウィンは『種の起原』では人間の進化の問題に立ち入らなかったが、キリスト教信仰との決別後、1871年に『人類の起原』を執筆した。

進化論についてはダーウィン後、ネオダーウィニズム、定向進化説、今西進化説などさまざまな考え方が生まれた。現在では、ダーウィンが考えた個体の変異は遺伝しないことが明らかになり、DNAの塩基配列やたんぱく質のアミノ酸配列など分子構造の特徴をもとに進化を論ずるようになっている。

しかし、科学史、思想史の中でのダーウィンの役割については、今でも研究がすすめられている。

## Key Word 種の起原

私は軍艦ビーグル号に博物学者として乗船し航海しているあいだに、南アメリカの生物の分布やまたこの大陸の現在の生物と過去の生物との地質学的関係にみられる諸事実によって、つよく心をうたれた。これらの事実は、わが国のもっとも偉大な哲学者の一人がいったとおりまさしく神秘中の神秘である種の起原にた

いして、若干の光を投ずるものであるように思われた。(略)

しかし私は自分にできるかぎりの慎重な研究および冷静な判断の結果、大多数の博物学者が受容し私も以前には受容していた見解 すなわちおのおの種は個々に創造されたものだという見解 はまちがっているということに、疑いをいただくことはできなくなっている。私は種が不変のものではないこと、おなじ属のものよばれているいくつかの種はある他の、一般にはすでに絶滅した種に由来する子孫であり、それはある一つの種の変種とみとめられているものがその種の子孫であるのと同種であることを、完全に確信している。またさらに私は、<自然選択>が変化の、主要な方途ではあるが唯一のものではなかったことをも、確信しているのである。

<八杉龍一(訳)『種の起原(岩波文庫)』 岩波書店>

## ◆ Great Books 文献案内

- 📖 種の起原 上・下(岩波文庫) 改版 / 八杉龍一(訳)  
岩波書店 1990年刊 <I467/ダ/1~2> 資料番号 20214490, 20214508  
\* 初版の翻訳。改訂版での記述については注で補っている。
- 📖 ダ・ウィン全集2 種の起原 / 内山賢次, 石田周三(共訳)  
白揚社 1939年刊 787, 22p <460.8/2/2> 資料番号 11272465  
\* マレー社 1926年重版(6版)の訳本
- 📖 Great Books of the Western World vol.49 Darwin / Robert Maynard Hutchins(ed)  
Encyclopaedia Britannica 1989年刊 659p <080/G/49> 資料番号 20257648  
\* The origin of species by means of natural selection and The descent of man and selection in relation to sex by Charles Darwin を所収
- 📖 The origin of species by means of natural selection or the preservation of favored races in the struggle for life and The descent of man and selection in relation to sex / Charles Darwin(by)  
The Modern Library 1936年刊 16, 1000p <Y467.5/1> 資料番号 21034202  
\* 『種の起原』は6版を所収

## ◆ 理解を深めるために 参考文献案内

- 📖 ダーウィン(「知の再発見」双書 SG絵で読む世界文化史) /  
パトリック・トール(著) 南條郁子(ほか訳)  
創元社 2001年刊 158p <289.3KK/1518> 資料番号 21429584
- 📖 チャールズ・ダーウィン生涯・学説・その影響(朝日選書) /  
ピーター・J・ポウラー(著) 横山輝雄(訳)  
朝日新聞社 1997年刊 301, 19p <289.3FF/1319> 資料番号 20921169
- 📖 ダーウィンの時代 / 松永俊男(著)  
名古屋大学出版会 1996年刊 377, 29p <402.33FF/101> 資料番号 20963153  
\* イギリスの自然神学の流れと、科学と宗教が分離していった過程を概観。
- 📖 ダーウィニズム論集(岩波文庫) / 八杉龍一(編)  
岩波書店 1994年刊 388p <I467/ヤ> 資料番号 20714846  
\* 『種の起原』刊行から50年間の生物学会、哲学者、神学者などの論争をまとめている。
- 📖 ダーウィン自伝(筑摩叢書) / ノラ・バーロウ(編) 八杉龍一, 江上生子(訳)  
筑摩書房 1972年刊 264, 5p <289.3C/350> 資料番号 10547552
- 📖 世界の名著 39 ダーウィン / 今西錦司(編)  
中央公論社 1967年刊 574p <080/5/39> 資料番号 12784567  
\* 「人類の起原」 / 池田次郎(訳)を所収
- 📖 ビーグル号航海記 上・中・下(岩波文庫) / 島地威雄(訳)  
岩波書店 1959~61年刊 <I40/ダ/1~3>